

⑤調経種子良方

等である。

このうち、①、②は一冊本、他はB4判一枚に印刷してある。①、②とも見開き二頁でB5判、①は一八〇頁、②は一六九頁よりなり、表題は似ているが内容は異なる。これらは、善書でもあり、民間療法がその内容となつてゐる。人々は寺廟に参り、祈願して、これら善書内容の治療指針によつて治療する。その人々も多く、そのためにこれら善書が処々の寺廟に収められているということは、台湾の民間療法が一つには宗教的色彩が強いこと、これによつて日常の治療のよりどころとしてゐることがわかる。現に演者に、この書にもられた内容が真実であり、現に行つていて、演者にもすすめた人も二、三にとどまらず、その人達の教育程度も高いものであった。

発表では、これら医学的善書にもられた内容にもふれた。なお、医食同源の色彩の強い、「全省素食処簡介」も追加する。

(小平市)

『外台秘要方』による古医籍輯佚の検討

小曾戸 洋

失われた六朝・隋唐の医籍輯佚に『外台秘要方』(宋版に限る)が第一級資料となることはここに述べるまでもない。量的にもさることながら、出典の巻次まで明示してあるからである。その引用文の表記法は原則として「○○方療……。××方同。出第△△巻中」というもので、これは「○○方」という医書に『……』と記されている。××方にも同様の記述がある。○○方の第△△巻中に出てくる」という意である。したがつて○○方の記載を『外台』中より抽出し、△△の巻数によつて順次配列復原すれば、○○方がどこにどのような内容の記された医書であったかを窺い知ることが出来る。加えるに、他の条文末尾に「○○方同」とある条文を抽出し、さらに『医心方』『証類本草』などの引用本を総合検討し、その巻次を推定して配置すれば、

〇〇方の輯佚復原が可能となるが、今回はこれに及ぶための基礎研究である。輯佚復原はその引用条文の多ければ多いほど完成度の高いものとなることはいうまでもない。そこで本報ではその可能性の大きい次の一六書につき、スクリーニングを行った。なお、便宜上、引用条文(処方)数(出典巻次の明確なもののみ)を推定全巻数で割ったものを復原度数としてみた(%ではないので注意)。

『広濟方』…引用処方総計三八三。唐志に「玄宗開元広濟方五卷」とあるのがこれ。開元十一年成。卷一〜五までかなりの率で引用がある。復原度数五一・八と高い。

『肘後方』…引用処方総計六〇八。ここに引用されるのは九巻本か。卷一〜九にわたっていずれも引用文がある。不完全な現伝『肘後備急方』の素性を検討する上でも貴重。復原度数三七・二。

『崔氏方』…引用処方総計三六五。巻数からみても旧唐志・唐志ほか著録の「崔氏纂要方十卷」がこれ。『外台』には卷一〜一〇までいずれも引用があり、卷一〇はさらに上・下に二分されていたことが知れる。復原度数三二・一。

『張文仲方』…引用処方総計三〇二。出自未詳。『外台』所引はおそらく十巻本で、各巻いずれも引用文がある。復原度数一九・八。

『備急方』…引用処方総計三三三。前出の『肘後方』と同じく九巻本か。卷七の引用文を欠く。『肘後方』と『備急方』、そして現伝本、さらに『医心方』所引『葛氏方』などとの関連について今後の検討が必要。復原度数一七・七。

『集驗方』…引用処方総計三二〇。姚僧垣撰。諸書籍志等によって十巻本と十二巻本のあったことが窺えるが、卷一〜一まで引用があるから『外台』の所引は十二巻本か。復原度数一七・三。

『刪繁方』…引用処方総計一九七。謝士泰(大)撰。隋志に十三巻、旧唐志・唐志に十二巻、日本見在書目録・通志に十巻とみえる。卷二〜一〇までいずれも引用がある。問題はあるが、『外台』所引は十巻本の可能性が考えられる。復原度数一五・三。

『必効方』…引用処方総計二四六。隋志・旧唐志の「孟氏必効方十卷、孟詵撰」のことか。卷七の引用文を欠く。復原度数一五・一。

『救急方』…引用処方総計一五三。出自未詳。卷一〜九までいずれも引用がある。おそらく九卷本か。復原度数一・九。

『小品方』…引用処方総計一八七。隋志・旧唐志・唐志等著録の「小品方十二卷、陳延之撰」がこれ。全一二巻中、卷八・九・一二の引用を欠く。復原度数八・九。

『延年方』…引用処方総計一六六。出自未詳。旧唐志の「延年秘録」とは別書と思われる。卷八・一八を除き、卷一〜一九まで引用がある。復原度数八・五。

『深師方』…引用処方総計三〇六。隋志・旧唐志・千金方等著録の「僧深藥(集)方、三十卷」がこれ。全三〇巻中、二〇巻にわたって引用がある。復原度数八・四。

『古今録驗方』…引用処方総計四九三。旧唐志・唐志等著録の「甄權撰、五十卷」がこれ。全五〇巻中、三二巻にわたって引用がある。引用条文数が多くとも全巻数が多ければ復原の効率は悪くなる。復原度数七・三。

『經心録』…引用処方総計二九。宋侠の撰で、隋志・旧唐志・通志に八巻、旧唐書本伝・唐志に十巻、日本見在書目録に六巻とみえるが、『外台』には卷一〜六までいずれも

引用されるから、その所引はあるいは六卷本か。復原度数四・三。

『范汪方』…引用処方総計一七六。「范東陽方」に同じ。隋志は百五巻、旧唐志・唐志・通志は百七十巻と記すが、『外台』所引はおそらく百五巻本。三〇巻にわたり引用文があるが、全巻数が多いので復原度数は一・四と低い。

『近効方』…引用処方総計一四一。出自未詳。「近効祠部李郎中」「近効極要論」「新附近効方」などともみえる。どういうわけか、一部を除き出典巻次のほとんどは未詳。したがって原典の全巻数の推定すら不能である。

以上の検討により、『広濟方』『肘後方』『崔氏方』などがとくに復原完成率の高い可能性が示唆された。詳細については改めて誌上発表する機会を持ちたいと考えている。

(北里研究所附属東洋医学総合研究所医史学研究室)